

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

66

初めて五葉山麓の森林浴道を訪ねたのは、神奈川県相模原市から住田町に移り住んで数年経った秋であった。私どもは家内の大病を機に、住田で農地を借りて食の安全・安心を求め自給自足の営農を始めていた。

農薬や化学物質が、環境ホルモンとして様々な病の原因となることがマスコミで取り上げられていた時期である。しかし、無農薬栽培した野菜は虫や菌でやられ、収穫は惨たんたるものだった。自給するには事足りても、生業とするには何か考えなくてはならなかった。

そんな折、五葉山麓の自然は鮮烈な印象を与えた。ブナやナナカマド、カエデは色づき、季節の移ろいを察しませてくれたが、私が驚いたのは肥料も薬も与えられていないのに、遅く降々と林立する樹木であった。「我が家の農作物の何と貧弱なことか」と、豊かな森で自分の無力さ、惨めさを感じ知った。

人は自分の人生を予見することができない。それだからこそ、不安になり、焦燥し、自信を失うことがある。明日の光が見えなくなると、気がつく絶望の淵に立っていることがあるが、それは深い海に限りなく広がる暗闇から、海上の明るさを求めてもがく姿に似ている。

青森で「奇跡の無農薬リンゴ」の栽培に成功した木村秋則さんも、きつとそんな心境であったのだろう。確かな考え、信念で取り組んできたはずなのに、病害虫や不作に見舞われ、生きる希望を

む力が湧いたに違いない。また、ブラジルの林幸美さんはその土地の生き物が何よりも豊かであることが大事であると、次のように言っている。「自然は食べ物として命を構築するにそぐわないものは分解する仕組み

素循環農法を説く。MOA自然農法の創始者・岡田茂吉は肥やしは毒だといって田畑に肥やしを入れることを禁じている。私は無農薬栽培に四苦八苦しながらも、いま何となくそのやり方が解りかけてきた。野菜や樹木にとって、その育つ土壌が大事であるように、人間にとっても育つ環境が大いのではないかと教えられた人がある。

五葉山の話が出るといつも「五葉のすごい人」を思い出す。温厚で誠実、決して怒らない、人としての美しさがぎゅー詰まっていた彼を。今度彼の面影とともにゆっくり登ろう。私に進む

べき道を授け、彼を育てた五葉に。
【執筆者プロフィール】一九四九年、大槌町生まれ。二〇〇〇年まで北里大学東病院で微生物検査に従事したあと、〇一年に就農。住田町安全・安心ネットワーク会議メンバー。無農薬無肥料の農作物を宅配や道の駅・種山ヶ原、サン・リア内JOIS、東京の自然食品店で販売している。

「土の力」に思うこと

大船渡市日頃市町 三浦康治

失い、自ら命を絶とうと山に分け入ると、悠然と立っているドングリの樹があった。

木村さんは「自然の中で何もしないのに、こんなにも立派に育っている」ことに驚き、このときの驚嘆は閃(ひらめ)きを呼んだ。木村さんはここから光明を見出し、新たな気持ちでリンゴの無農薬栽培に取り組

（病害虫）。だから、田畑も自然に倣い土地の生き物（微生物）を活かし、彼らに植物（米、野菜）を育てて貰った方がよい。彼ら根圏微生物は可も不可もなく絶妙なバランスで養分を植物に与えてくれる。百姓は決して田畑に肥やしをやるのではなく、餌（炭素）を与え微生物を飼うことだ」

林さんはこのように炭素に会ったと、彼は病に侵されていて高校時代の

釜石工業高校の同級生であった紺野澄雄君である。彼は木訥で物腰が柔らかなだけでなく、明晰な頭脳は芸術、文学、科学などの分野に遺憾なく発揮され、「住田の五葉にはすごい人がいるものだなあ」と思わずにはいられなかった。

リレー
エッセイ

平成一十二年に三十数年

五葉山麓の森

五葉山麓の森



五葉山麓の森